

# 都市の居住地におけるエディブル・ランドスケープの変遷と形成に関する研究

—理論化のための予備研究として—

主査 木下 勇\*<sup>1</sup>  
委員 林 のり子\*<sup>2</sup> 藤井英二郎\*<sup>3</sup>  
〃 森 まゆみ\*<sup>4</sup> 望月 菜穂\*<sup>5</sup>  
〃 吉川 仁\*<sup>6</sup>

キーワード：1)景観，2)緑地，3)まちづくり，4)住民参加，5)コスモスペース，6)屋敷，7)エコロジー，8)サステイナブル，9)コミュニティ，10)コミュニケーション

## 1. 研究の目的と方法

### 1.1 研究の目的

エディブル・ランドスケープ (Edible Landscape) とは、直訳すると「食べられる景観」であり、米国では「植栽の大多数の部分が食べられるもの（果実や木の葉など）を提供する景観」を一般には指している<sup>(1)</sup>。もともとは家庭の敷地内の園芸において使われ出した言葉である。その提唱者のRosalind Creasyは次のようにいう。「食卓においしく健康的なものを運び、水や土、エネルギーの消費を切りつめ、食べられる植物をもちいて美しくよく計画された景観をつくること」<sup>(2)</sup>。

庭や公園づくりの園芸では従来は花が中心であり、「食べられる植物」は美に劣るという認識 (Edible Complex) から敬遠していた。しかし、今日の食物の安全性や環境問題を背景に、可能な限りの自立した生活を求める方向と、収穫の楽しみと花の時期の美しさなど、四季を通じた楽しさを享受する価値からエディブル・ランドスケープという言葉が提起されてきた。

つまり、この言葉は環境問題や景観形成への市民参加の導入としても可能性をもっている。そこで連想するのは、子ども時代に多くの人が経験したように、遊びの中で周囲の食べられる実を口に入れた風景である。しかし現在の子どもたちにとってどうであろうか。過去から現在、農村から都市という変化の中で、我が国のエディブル・ランドスケープはどう変わっているのか、という点が気になってくる。ここでは園芸で使われたこの用語を都市空間に広げて、時間軸、空間軸の広がりの上にエディブル・ランドスケープの意味を捉え直し、それを切り口とした環境形成の理論化を進める一助としたい。

### 1.2 研究の方法

「エディブル・ランドスケープ」を「食べられる景観」

とすると、英訳の微妙なずれも重なり、様々なものが入ってくる。柿の木のある景観やザクロの垣根などはよいとしても、梅は採ってすぐ食べるわけにはいかない。では水田はどうか、とか。さては八百屋の店先はどうか、はたまた墓の供え物はどうか、といった問いが寄せられる。この疑問は際限なく広がりうる。

そこで、便宜的にエディブル・ランドスケープの典型的な対象を中心に置き、やや異なりをもつが類するものを周辺に置く。その中心に置く概念は、米国の概念と同様に「主要な要素が食べられる植栽によってなされている景観」とする。この場合に生食か加工が必要かは問わず、一般に食用に供している植栽を意味する。

何にせよ明確な線引きは現実の事象に合わない点もあり、境界領域に浮上するものは、概念を再考させるものとして視野に置く必要がある。例えば、干し柿の柿のれんや大根干しといった生活風景があげられよう。食文化や生活文化の点から概念を再考させる好例といえる。

この暫定的な概念をより明確にするためにも、ここでは予備研究としてエディブル・ランドスケープの意味を我が国の事象の中から探ろうとする。その組み立ては次の構成となっている。

(1) 都市の市街化の変容によって、居住地のエディブル・ランドスケープはどのように変遷したのか。ここでは世田谷区太子堂・三宿地区（以下、太子堂地区と呼ぶ）を対象地を選定し、その変遷をみた。まずは三世代遊び場調査の既存データを整理し、三世代という時間軸上での変化の概略をみる。次いで都心部と郊外部の都市化の空間軸上で比較しうる地区を選定し、現況観察と聞き取り調査を実施した。対象地は当地区（太子堂二丁目、三宿一丁目）と比較するべく都心部として古い町の形態を残す根津地区（根津一・二丁目、上野桜木二丁目、池の端三・四丁目の一部）、郊外地として国分寺新町地区（新

\*<sup>1</sup> 千葉大学園芸学部 助教授

\*<sup>2</sup> <食>研究工房 主宰

\*<sup>5</sup> (有)ワークショップむぎ 代表取締役

\*<sup>3</sup> 千葉大学園芸学部 助教授

\*<sup>6</sup> (有)防災&都市づくり計画室 代表取締役

\*<sup>4</sup> 谷根千工房主宰 作家

町一～三丁目)を選定した。調査は1996年11月に行い、聞き取り調査対象者は根津地区12名、太子堂・三宿地区24名、国分寺新町地区12名である。

(2) エディブル・ランドスケープの意味・役割にはどのようなものがあり、どう変化しているのか。(1)の調査結果を受けて研究座談会の討議を重ねて各分野から考察を加える。ここでは食文化、文学・生活史、生態学、景観、防災、園芸セラピーの分野から検討を重ねた。

(3) エディブル・ランドスケープの阻害要因と形成への方策は何か。エディブル・ランドスケープ形成の阻害要因をこれまでの分析に加え、公共空間における事例を探り、課題を明らかにすると同時に、形成方策の諸事例をとりあげ方向づけを行う。また海外の先駆事例を参照して考察する。

## 2. 既成住宅地におけるエディブル・ランドスケープの歴史の変遷と現状

### 2.1 世田谷区太子堂地区の三世代にわたる変遷

三世代遊び場マップ・図鑑<sup>22)</sup>で明らかにされたように祖父母、父母世代においては遊びを通して密に環境と交わり、エディブル・ランドスケープもそういう遊びの情景の中に登場している(表2-1)。

「屋敷から出ているシイの木をゆさぶって実を穫った。板塀を乗り越えて行って、ブドーとザクロの実を食べて怒られたこともある」(大正13年生まれ男性)。

「…ビワの木が道に面していた。その木に登って、ビワを採り食べた。垣根の所どころ、開いている所からもぐって入った。母親同士親しく、隣近所づきあいがあったので、平気だった」(昭和22年生まれ男性)。

このように都市の表層の素材の柔らかさや、近隣関係によっても保障されていた面もある。

三世代遊び場調査で明らかにされたような現在の子どもの環境との関わりにおける希薄化は、エディブル・ランドスケープにおいてもあてはまる。三世代アンケート調査の結果<sup>23)</sup>をみると、柿などは今の子どもたちにもなじみがあるが、グミ、クワとなると知らない子が4割

を占める。個々の屋敷はブロック塀などで固く閉ざされ、また、マンションの立地でのエディブル・ランドスケープは、総体として大幅に減少したと推定される(聞き取り調査のため実量で実証することが不可能であり、部分的な宅地の変化を図2-1に示す)。野原が消失し、建て詰まりとともに野草・雑木類は減少したのは明らかであるが、屋敷内の実のなる木類は、ブロック塀で囲われた宅地内や駐車場に変化した用地の隅に残存している場合がある。これらも現在のエディブル・ランドスケープの主要素となっている。

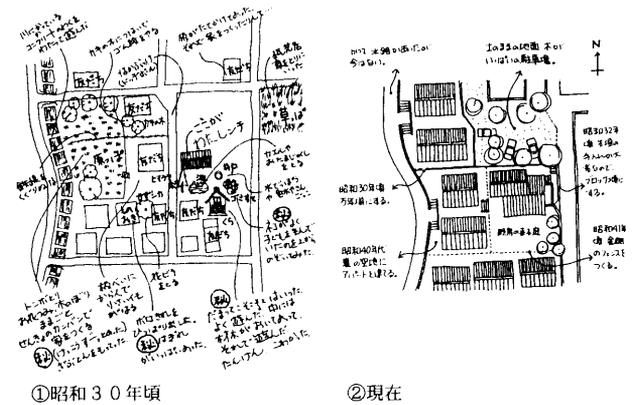


図2-1 太子堂地区 遊びからみた宅地環境の変化

### 2.2 太子堂地区と都心、郊外の他二地区との比較

太子堂地区(太子堂二丁目・三宿一丁目)において把握されたエディブル・ランドスケープとなる植栽では、最も多いのが柿であり、次点の梅の2倍近い量となっている。この柿、梅が突出しており、3番手にビワ、モモ、5番手にブドウ、次いで夏ミカン、キンカンなどの柑橘類が並ぶ(表2-2)。これらのほとんどが個人の宅地内にあるものである。一方、根津地区でもやはり柿が突出して多い点には変わらないが、次いでビワとなり、全体に種類は多い。これは、姫リンゴなど鉢植え可能な種類やプランターの栽培種も入ってきているためでもある。玄関前などのプランターに山椒やハーブなどを植え

表2-1 太子堂地区における三世代にわたる子ども期の記憶の中でのエディブル・ランドスケープ(三世代遊び場調査より)

祖父母世代	父母世代	子ども世代
「井戸のまわりでペーゴマ。宮田さんちの前の階段でメンコ。山本さんちの路地裏、垣根の中へかくれんぼの時遊び込んだ。垂井さんの屋敷から出ているシイの木をゆさぶって実をとった。板塀を乗り越えて行って、ブドーとザクロの実を食べて怒られたこともある」(大正13生、男)	「家の庭から板塀をくぐり、裏の家のザクロの実を採って食べた」(昭和19生、男)	「夏になるとクワの実が紫色になる。木で突っついて採って洗ってから駐車場で食べる。いっぱい採ると手が痒れるけれど甘くておいしい。ウメドキの実も赤く小さくて甘酸っぱい」(小5女子)
「ノドが乾いたからこのトマト頂戴ね」と声をかけてから畑のトマトをタダで食べた」(大正5生、女)	「柿、グミ、イチジク、カブ等よく盗んだ」(昭和19生、男)	「ニセアカシアの落ちて実を拾って、ヘタみたいな所を吸うと甘い」(小5女子)
「川岸のアカザ、モチ草、フキノトウを採る」(大正11生、女)	「グミ、ユスラウメ、カキ、ウメなど実のなる村は楽しみだった。ツツジはしゃぶると甘い」(昭和17生、男)	「オシロイバナの蜜を吸う」(小6女子)
「シイの実を食べたが、ドングリを食べると吃りになると言われた」(大正11生、男)	「円泉寺の境内で銀杏を採った」(昭和20生、男)	「公文整の裏で、ブドー、ザクロを採った」(小4女子)
「みんなで畑まで、ジャガイモを拾いに行き、刻んだりしておママゴトをした」(大正5生、女)	「山口さんちのビワの木が道に面していた。その村に登って、ビワを採り食べた。垣根のところどころ、開いている所からもぐって入った。お母さん同級親しく、隣近所づきあいがあったので、平気だった」(昭和22生、男)	

表2-2 街路からみたエディブル・ランドスケープの状況（街路から把握できる公共空間，屋敷内の植栽）

調査日：1996年11月

太子堂・三宿地区

	柿	梅	ビワ	桃	ブドウ	金柑	夏ミカン	栗	サクロ	ミカン	アズ	ユズ	姫リンゴ	グミ	キンナ	グレープ	カリン	サザナ	アヲ	ナシ	クコ
三宿1丁目	26	12	2	1	4	5	4	3	1	3	3	2	3		1	1					
太子堂2丁目	33	19	8	9	4	2	3	2	4	1	1	2		2			1	1	1	1	1
合計	59	31	10	10	8	7	7	5	5	4	4	4	3	2	1	1	1	1	1	1	1

根津地区

	柿	ビワ	姫リンゴ	イシガ	ユズ	ブドウ	夏ミカン	サザナ	梅	カリン	サカ	ミカン	ハー	ボケ	銀杏	山椒	シソ	キウ	ナツ	クワ	アヲ	モモ	サボ	クル	クコ	クリ	シガ	アロ	アケ	イ	チ
根津1丁目	11	8	1			1	4		3	2	1	2		2	1				1												
根津2丁目	12	3	5	6	4	2		3	1	2	1								1	1	1										
上野桜木2丁目	7	8	2	1	3	3	2	2	1	1	1	3			1		2	2								1	1	1	1	1	1
合計	30	19	8	7	7	6	6	5	5	5	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

鉢植え

根津1丁目：姫リンゴ 1

根津2丁目：姫リンゴ 3、ユズ 2、サカ 1、ブドウ 1、キンナ 1

上野桜木2丁目：ハー 4、山椒 3、姫リンゴ 2、アヲ 2、シソ 1、唐辛子 1、ミガ 1、サザナ 1、イガ 1

なお、国分寺新町地区はデータが同等レベルで揃わないため表記しない

ている光景は、街路上からみたエディブル・ランドスケープの下町的な特徴ともいえる（3.2 参照）。なお、国分寺新町地区は、数値データが比較に耐えられるほど精緻に把握できていないために厳密にいえませんが、まだ畑が散在し農村的な名残もみられる環境で柿がやはり多く、干し柿などの光景もみられた。この景観をみると、概念上は境界領域に位置づけた干し柿もそばに柿の木がある以上、中心概念に入れてよいのではないかと考える。国分寺新町では次いでブドウやミカン・ユズなど柑橘類が目立っていた。

これら実のなる木類に対して各居住者はどのような意識をもっているか、聞き取り調査の抜粋を並べたのが表2-3である。聞き取り調査の項目は、その植栽の経緯や利用、管理などについてである。

それぞれの語りには、20年、40年も前のことであっても、その実のなる木のいきさつを記憶しており、愛着や誇りが強くあらわれているものが少なくない。

例えば、「ミカンは娘の誕生日に友人からいただいたものです。はじめは20センチくらいで植木鉢に入っていて、2～3個実がついていました。手入れは特に何もしていませんが、毎年2～3個採れて、昨年は10個できました。酸っぱいですが、結婚した娘の所へ届けています」（K12）というように、そういう実のなる木を植えた経緯は、何かの記念や祝いである。その他、市場や生産地で求めたり、そして「食べた果実の種をためしに植えたら生えてきた」など記憶に残る特別な印象となっている。

また、以前に住んでいた環境（特に農村部など）を懐かしむように、以前の場所から持ち運んで移植している場合も少なくない（S6, K2, K3, K5など）。これは、住宅地として他の2地区よりは新しい住宅地の国分寺新町地区に多く聞かれた。

さらに、次のような縁起かつぎもある。「昭和27年頃、結婚した時、埼玉県児玉郡から柿の木はネギの束の中に入れて、カリンの苗（指位の大きさ）も。金は貸してもカリンなど庭先に植えるようにもいわれた」（S1）と。

食べられる植栽にまつわる民間伝承には様々なものがあり、聞き取り調査でも所どころに聞かれ、この点についての全体像は別枠で研究を立てる必要がある。柿についても「渋いから上の方のお日様にあたるとこだけ仏様にあげるの」（N10）の他、木守りといひ鳥のために最後の1個は残しておくとか、旅人のために残しておくなどのいい伝えがある。

ふだんの利用では生食できるものは、食に供することもあるが、盗られたり、鳥の食用となっている場合も少なくない。そう強い執着心ではなく、自然に任しているという感じである。ジャムや果実酒など、加工を手づくりの楽しみで行う場合の方が季節行事のように定着している感がある（N1, S2など）。そのため維持管理では、肥料をやったりという積極的な手間はかけず、消毒が必要なものを年に1回程度消毒するくらいである。なお果実の盗難では、かつてのように子どもの悪戯というより大人による被害も目立つ。今の子どもたちには見向きもされず、また通りすがりの者によって興味本位で果実が熟さない前に盗られて、道にすてられているというような状態である（N11, S6, S11など）。鳥の方が熟したのを見分ける目をもっていると指摘される。これは飽食の時代ゆえの現象であり、エディブル・ランドスケープの変遷で問題に掲げる第一点である。

一方に実のなる植栽の収穫物は近所や親類に分けたり、珍しいものでは通りいく人に名を訪ねられたりというコミュニケーションにも役立っている面はまだ存在する（N1, N2, S3, K9など）。

また、調査事例地の中には公園、広場、歩道の植栽などに実のなる木が植えられている例がいくつかみられた。公共の場ゆえに心ない者の被害に会う危険性もより高いが、愛着をもってそれらを気遣う住民の関わりも示している（N11, S14など）。

### 3. エディブル・ランドスケープの意味（役割）論

ここでは、前述の調査結果を受けながらエディブル・ランドスケープの意味について、研究座談会で討議した



各専門分野からの考察を述べる。

### 3.1 エディブル・ランドスケープの景観生態学的解釈

人は、視覚をはじめとする多くの感覚を通して環境からの刺激を受容し、脳において記憶と照らし合わせながら判断・処理し、認識する。人はそうした認識をもとに環境に対して様々な改変を加え、改変された環境はまたその認識を変化させる。また、認識は改変という行動自体によっても変化する。つまり、人と環境の間には環境からの刺激を受け取る認知と、環境に働きかける営為との間に一種の回路が成立しているのである<sup>24)</sup>。従って、環境の認知は環境それ自体と環境を認知する人の経験や知識、心などによって規定されるものであり、また、多くの人為が加えられた環境には、人為を加えた人の認知の実態が投影されている場合が多いのである。

環境の認知に関わってもう一つ注目すべきものとして、情動の中核である脳幹の視床下部と大脳辺縁系がある<sup>25)</sup>。感覚は、例えば後頭葉の視覚野のようにその中核が大脳皮質の一部に局在するが、怒りや悲しみ、安らぎのような感情は全身的な反応ともいえ、その中核は脳の内部の進化的により古い脳である視床下部や大脳辺縁系にある。そして、そこは生命を維持するための呼吸や循環、栄養などを司る中核ともなっているのである。これらのいわゆる植物的機能は自律神経系によって制御されており、意識の働きからは独立しているわけであるが、その中核が情動の中核でもあるためにその機能は感情と無縁ではない<sup>24)</sup>。

エディブル・ランドスケープを食べられる植物（または生き物）を含む景観とするならば、それは目でなくお腹からみた景観ともいうことができる。食べるという行動は、視覚や味覚、触覚、聴覚などの感覚を伴い、併せて食欲をはじめとする情動、さらには消化、呼吸などの自律神経系を司る視床下部も関わる行動であって、心身を多面的に刺激する行動である。そうした食の行動と併せて知覚される景観は、視覚が優占した景観に比べてより深く記憶されるのが一般的であり、それが繰り返されると食べ物だけでもそれを生み出す景観が想起され、またその景観にたとえ食べ物がない時であっても豊かな景観として知覚されることとなる。このような意味で、エディブル・ランドスケープは人と環境との直接的接触が少なくなった今日の状態を変える可能性をもつ。つまり、見ることや聴くことなどの遠隔的、間接的知覚が優占する今日の人と環境の関係において、心身と環境の一体的知覚の機会を増やし、薄れがちな環境に対する人の主体性を取り戻す場となる可能性がある<sup>26)</sup>。

日本の庭、特に農家の庭はそうした場の一つであり、それは最も身近なエディブル・ランドスケープといえることができる。そこには食べられる植物が数多くみられ、その配置は、例えば広庭周辺のカキノキ、勝手近くの低

地に植えられるイチジク、木陰や建物の陰に広がるミョウガ等のように、農作業をはじめ農家の生活や屋敷内のミクロな立地の違い、植物相互の関係を考慮したものである<sup>27)</sup>。それは長い年月をかけて蓄積された生活の知恵であり伝統文化であって、エディブル・ランドスケープの原点として十分評価されてよいものである。

### 3.2 生活文化としてのエディブル・ランドスケープ — 2つのテキストから —

前述のように、景観生態学の点からエディブル・ランドスケープの意味を見出してみると、食文化、生活文化として、見直してみる必要がある。以下にこの分野を得意とする研究メンバーの二人が書いたテキストを掲載する。研究論文としての文体が他と揃わないのをそのまま掲載するのは、著者の専門性を尊重し、文脈や生活感が削がれるのを嫌ったためであるが、内容としては一連の研究活動の成果が含まれていることを注記する。

#### <都市生活の中で自然を食す目> 林 のり子

あるランドスケープがエディブルであるかどうか、これは地球上のすべての生き物の<アンテナ>にかかっているはずだ。まず動物的・全身的な<五感+α>を<アンテナ>として、ランドスケープからエディブルなカズカズを識別し、掬いあげます。人の場合は、これに宗教・習慣などの網をかけて選別し、ここではじめてエディブル・ランドスケープとしてみえてくる、ということでしょうか。

例えば谷中の墓地。ここには凶鑑にあるほとんどのキノコがみられるそうです。梅雨時には100種以上のキノコが“一日で”顔を出すとのことですから、キノコにとってここは繁殖するのに絶好なエディブル・ランドスケープなのでしょう。そして下町の墓地にニョキニョキと登場するキノコは、そこに住む人たちにとって別の次元のエディブル・ランドスケープとなるわけです。いま一つ、多摩川に近い住宅街をみますと、公共の土地には武蔵野雑木林の名残をとどめて、ケヤキ・ナラ・クヌギなどの落葉樹が多くドングリはあるのですが、住宅の垣根は目隠しのために常緑の灌木となり、ひと目でエディブルとわかるフルーツやベリー類のなる木は本来あまりありません。

しかし木陰を求め、あるいは生け垣のレンギョの花をつつきに来た鳥が、おみやげに糞と一緒に桑の種を落とし、いつの間にか桑があかい実をつけている、といった光景を目にすることはしばしばあります。双方とも都市の住人にとって特にエディブルではなかった景観が、キノコや鳥にとってはエディブル・ランドスケープとして機能し、その結果生まれたランドスケープが人にとってエディブルになった、といえるでしょ

う。

さて、しかし都会の人にとってなじみの薄い木々が序々に自然発生的に増えてくると、そこになる実がはたしてエディブルかどうかかわからず、折角のごちそうを見逃してしまう恐れは、多分にあるはずです。現代の人々は食べられるものに囲まれて餓死するだろう、とは「子噛み孫喰い」(筑摩書房)にある野坂昭如氏の言葉だと思いますが、現代の都市住人にとっては身につまされるものがあります。

そんなことを感じている時にお会いしたのが仙台の都心に近いマンションに住まわれる74才の結城キクエさん。テレビで“今年もイナゴがとぶ季節になりました”とあると、やおら田圃にでかけてイナゴを捕り、佃煮をつくります。

ご主人のお墓参りがたら、お寺のカヤの実をひろい、アクヌキをしてお寺におさめ、残りを好きそうな人たちに小分けして配ります。拾っていると“その実、食べられるのですか？どうやって食べるの？”って聞かれるけれど、わざわざアクヌキしてまで食べようという人はいないからネ、と耳の痛い話になります。

キクエさんは山形の山あい、7軒のある小さな村に育ち、雪解けをまってはじまる山菜採り、夏のアシヤ薬草採り、二百十日からのクリ・クルミ・カヤ・トチ・ドングリ拾い、秋のアケビやキノコ採り、そして冬はイロリ端でアケビの蔓でカゴをあみながら、毎日一度はたわいないことで大笑いする、そんな生活をおくっていた方です。この通称七軒村は廃村になって四半世紀になりますが、その後も毎年春先の一カ月は昔の蔵に寝泊りして、一人で山菜採りをしながら山の生活を楽しんでいられます。

そして口ぐせは、“自然の中には食べるものはいつでもあるから、今日食べる分だけ採ればいいのさ。それでも残ったらキチッと保存するの。10年でももつからね”

なんという余裕でしょう。実はこれは三陸の老漁師の言葉と全く同じで、“ウーン、この一致は何なのでしょう”と、ともかく感動するばかり。このお二人の共通点は、自分が種を蒔くことはせず、あるものを受けいれるところでしょうか。自然を識別する<アンテナ>の力を痛感する瞬間です。そして今、キクエさんはその<アンテナ>をもって仙台の町中や川辺、お寺の境内を歩き、普通の目にはみえないエディブル・ランドスケープを楽しんでいられるのです(写真3-1)。

<古い東京で暮らした体験から> 森 まゆみ

私の住む町、谷中、根津、千駄木は震災、戦災に焼け残った町である。高台には4500坪の敷地をもつお屋敷が残り、夏ミカン、柿、ピワ、ザクロなどの実のな



写真3-1 結城さんによる故郷の山とマンション周辺の収穫物を使った料理

る木も多く、おすそわけにあずかることがある。高台の屋敷町は江戸時代の大名屋敷、武家屋敷の後につくられている。

明治2年(1869年)、東京府知事大木高任は、維新で空洞化した旧武家地の300万坪に桑や茶を植えよう、という桑茶政策を打ち出した。幕末以来、生糸と茶は有力な輸出品であり、士族授産をもくろんだのである。これによってまたたくまに山の手は桑茶畑と化した。小石川で13万9000坪、駒込で9万4000坪。この政策は明治4年、次の府知事由利公正によって廃止されたが、桑茶畑はずっと後まで続いた。

明治19年、東京に生まれた平塚らいてふ(婦人運動のリーダー)は、その自伝に駒込曙町の数百坪の自宅で毎年、茶摘みが行われ、それを一家で服していたと書いている。明治5年生れの樋口一葉の「通俗書簡文」にも、西ヶ原の別邸で茶畑をこしらえる例文がある。質素勤儉、自給は江戸以来、武士の道徳であり、それが明治の山の手をつくった士族にも伝わったのだろう。

一方、下町である根津や谷中の一部にはいわゆる路地裏園芸が盛んである。こうした庭ではなく、家にへばりついたわずかな地面や鉢、プランターでも、人々は単に目を楽しませる植物よりも、食べられる有用な植物を植える。シソ、ニラ、ミツバ、ミョウガ、キノメといった味の彩りになる薬味、香草はよく植えられている。例えばシソ(オオバ)はスーパーで10枚100円もするが、1本植えておけば、何百もの葉が茂り、近所の人にも自由に使わせてあげれば、コミュニケーション・ツールにもなる。

店先にオオバを植えている豆腐屋さんがある。店の美観に役立ち、食欲、購買欲をそそり、実際の役に立つ。一石三鳥である。そのほかドクダミ、ユキノシタ、アロエなど漢方・民間療法で風邪・熱さまし・虫ささ

れなどに効くとされる薬草を植えている家も多い。

樋口一様の日記をみると、明治の東京下町がさながら園芸都市であったことがうかがわれる。

「(明治二十四年六月)十八日。…人より茄子苗の若やかなるを貰ひて母君植る」

「十九日。今日も晴なり。朝とく庭前の梅の実を落とす。みそこしといふ筈の一つありたり」

「家にある茶の樹に、はふ虫のまゆをつくりたる、いとめづらかなりとて、妹の取たるをみるに、ただ絹の綿もてつつみえる様に、いとうつくしく、ゆるしげにもあらざりけり」

「(二十五年三月)七日。…晩さんの設ぞとて母君団子籠をたづさえへて下りたち給ふは、わか茶つまんとて也」

まだまだある。一家三人、菊坂下道の路地裏に一月九円の生活費で住む一葉たちにとっては、庭の草や野菜、木の実が切実な生活の糧であった。

昭和29年、文京区動坂下に生れた私はよく町で遊んだ。空き地や路地はまだそこここにあり、じゅず玉をつないでネックレスにしたり、おしろい花の種を割って白い粉を顔につけたり、赤トンボを追いかけた。中でもサルビアの花の蜜を吸い、シイの実を集めて炒って食べ、晩秋には東大構内や六義園に軍手とビニール袋をもってギンナンを拾いにいった。

密集し、都市化した町でも公共用地が多いのはありがたい。あれから30年以上たった今も、子どもたちや仕事仲間と谷中墓地でムカゴを採ってご飯に炊き、キンモクセイ酒をつくり、ヤエザクラを塩づけにして桜茶を楽しんだりする。願わくば墓地や公園にもやみと殺虫剤を撒かないで欲しいと思うのみである。

#### 4. エディブル・ランドスケープ形成と管理の方策

##### 4.1 エディブル・ランドスケープ形成の阻害要因

事件は1994年6月14日に起こった。世田谷区北沢川緑道にて、幅0.7m長さ10mの区画に、沿道の代沢小学校の児童らが植えたサツマイモに対して、学校に移植するよう区から注意が出された。ある住民から「特定団体による野菜や梅等の栽培は公園等の私有化ではないか」という苦情が寄せられたのを契機に、区は「花による緑化推進事業実施要綱」で明文化し、規制を強めたのである。このサツマイモの緑道への植栽は、緑道再整備計画をきっかけに発足した地域組織「子どもと緑を育てる会」が、小学校の教職員とともに生活科の授業の一環で行っていたものである。結果は公園課に委託された業者がやってきて、サツマイモはプランターに移植されてクレーンで体育館2階のベランダに移された。その後の緑道上の花壇には野草園づくりが会によって企画されたが、「ヨモ

ギや野イチゴを」と声が出ると「実のなるものは駄目です。いろいろ問題がありますので」との注意を区から受けた。この顛末に対しての意見を募集した結果、教育的意義を踏みにじる行政の禁止規定への批判、特定団体とみえるような活動の反省と方法への配慮、学校と地域と行政との関係づくりなどの指摘に大別される<sup>28)</sup>。

行政側に聞くと「花壇植栽は花、分区園でない。だから食べるという私物化となるものは駄目」という。

世田谷区立公園等における「花による緑化推進」事業実施要綱（平成6年6月1日、世公園発第32号建設部長決定）によると、その規定の中で次のように記載されている。

##### (禁止事項)

第9条 協定団体は次に掲げる行為をしてはならない。

(1) 花壇地において、野菜、果実等の栽培を行うなど、花壇地を私物化して使用すること。

では、公園に食べられるものの植栽は不可能かという、制度的には可能である。都市公園法第二条第二項第六号には公園施設として「教養施設」があげられ、その詳細については同法施行令第4条5に記載されており、その中で植物園、温室、分区園、そして1993年に法改正によってできた自然生態園、体験学習施設として可能性がみられる。

しかし、新設で公園を整備する時には実のなるものは敬遠される。それは「今は採って食べられるということより、下に落ちてきたないという苦情や清掃管理の手間暇の問題」<sup>29)</sup> という。新たなエディブル・コンプレックスともいえ、これまで変遷みてきた人間との関係の希薄化現象とも考えられる。

##### 4.2 エディブル・ランドスケープ形成の方策

###### (1) ワークショップの活用

前述のようなエディブル・ランドスケープの阻害要因やコンプレックスに対して、ワークショップによって身近なエディブル・ランドスケープを再認識するというプログラムが考えられる。筆者らは、住民参加のまちづくりの現場でこのワークショップを行い、さらにこの研究活動の一環として実験的に2箇所で開催の場を借りて、意識化のプログラムを実施した。

一つは1996年10月2～6日に京都府長岡京市内で行われた子ども会活動のリーダー研修（全国青年教化協議会主催）であり、もう一つは1996年11月9日に開かれた親と子の建築・都市教育講座（日本建築学会・国立博物館共催）である。その結果、このプログラムにおいては以下の特徴をもち、エディブル・ランドスケープへのまなざしを向けるのに有効であることが示された。



写真4-1 子ども期の体験から現在のエディブル・ランドスケープを考えるワークショップ作業の成果（親と子の建築・都市講座におけるワークショップより）

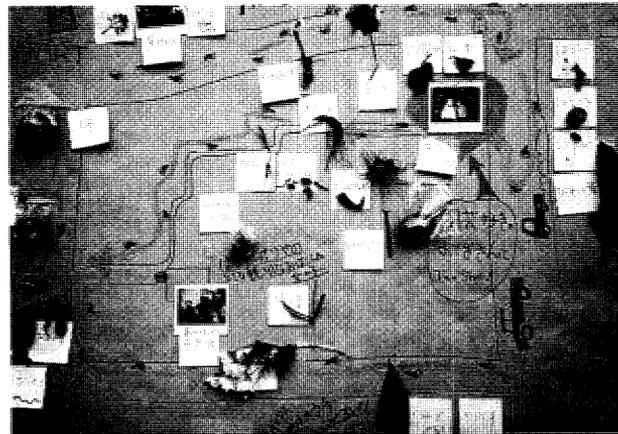


写真4-2 エディブル・ランドスケープ探索プログラムは環境の豊かな側面を引き出し、また、持ち主とのコミュニケーションのきっかけとなる（長岡京市におけるワークショップより）

- ・子ども期の食べられる植栽を採って食べた経験の記憶はエピソードとともに鮮明に蘇り、前述したような生活文化を見詰め直す面で有効である（写真4-1）。
- ・周囲のエディブル・ランドスケープを探索するプログラムは、その持ち主とのコミュニケーションのきっかけをつくり、目にみえないエディブル・ランドスケープの意味を再認識させる（写真4-2）。
- ・テーマが参加者にわかりやすく、楽しさが醸し出され（胃をも刺激するのか定かでないが）、環境を考える糸口として有効である。

## (2) 公共施設のエディブル・ランドスケープ

道路に食べられる植栽を植えたものは他にアンズ、ヤマモモ、ミカンなどいくつかみられるが管理面でやはり苦慮している。40数年前に中学生によって植えられ、代々管理が引き継がれている長野県飯田市りんご並木<sup>29</sup>や、福井県上中町のアンズロードのように、やはり住民の発想で整備された所の方が管理面でもよい。

公園では積極的に果樹を植えた例が、江戸川区宇喜多

南児童遊園や足立区関原地区の防災果樹園などにみられる。前者は行政側に食べられる植栽の発想があり、住民への働きかけによって「実のなる木を育てる会」が組織され管理にあたっている。児童遊園内にはリンゴ・ミカン・ブドウ・ブルーベリー・ラズベリー・柿・桑などがあり、リンゴの収穫祭やラズベリー酒をつくるなどの活動につながっている。また、足立区の関原地区では行政主導によって防災まちづくりが進められたが、町内会などの組織のまとまりもあり関原グリーン・フェスティバル、防災路地緑化など市民の緑への関心が高まり、防災のための公園・広場整備の中での発想による防災果樹園の整備が進められた（完成1990年）。柿、夏ミカン、ザクロ、リンゴ、アンズ、モモ、梅などが植えられ、雨水利用のシンボル池はかん水の役割もふだんははたす。「関原防災果樹園を愛する会」が発足し、管理に携わり、収穫祭が催されている。

かつて、我が国では飢饉を経験していた時代には、いざという時のために実のなる木を植える知恵が生まれた（例えば銀杏など）が、このように防災を大義名分としながら、実を楽しみ、エディブル・コンプレックスの苦情を克服することも考えられる。

建築物の立体緑化は環境問題への関心とともにグリーン・アーキテクチャーなる概念も打ち出され、そういった中には食べられる植栽を施している例もみられる。大阪のふれあい港館はワインケラーとレストランを設けた国際交流の施設であるが、ガラス面の上にブドウを規則的に並べ、噴水とともに全く土臭さを感じさせず、人工的な都市のエディブル・ランドスケープを描いている。

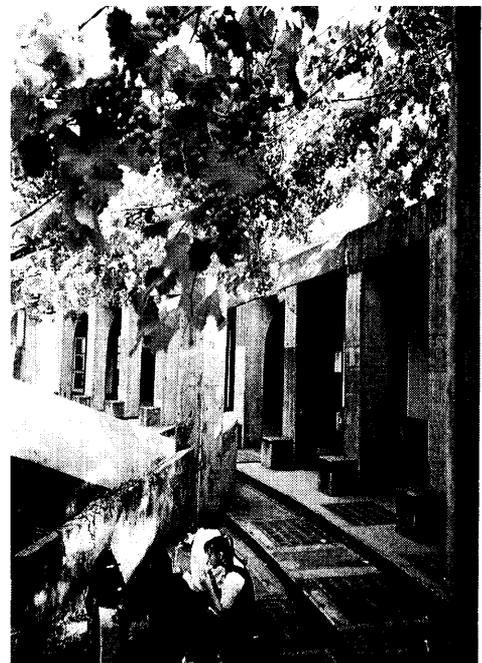


写真4-3 ぶどうの蔓に覆われた進修館のテラスと障害者団体による喫茶ロビーは高校生のデートスポットにもなっている。

ブドウの植栽を施した例としては象設計集団による埼玉県宮代町の進修館は先駆的な例であろう。コンクリートの骨が露出していた建物も今ではブドウの蔓がからんで見事な実をつけている（写真4-3）。

建物2階に障害者団体が喫茶コーナーを開き、その名が「ぶどうの木」であることからブドウがいかにシンボルとなっているかがわかる。実が食べごろになった日を、町で解禁日と設定して一般市民が収穫に繰り出すのも風物詩となっている。

このように公共施設の環境への人の関わりを誘いこむ手段としてもエディブル・ランドスケープの役割がある。

### 4.3 米国の先駆例にみるエディブル・ランドスケープ

#### (1) コミュニティガーデン

アメリカならではのエディブルランドスケープデザインを代表するものに、「コミュニティガーデン」がある。コミュニティガーデン運動は1970年代にはじまり、80年代以降、全米規模で盛んになっていった。この背景には、インナーシティに空き地が増え生活環境が荒廃しはじめたこと、自給自足による家計費の節約、食物の安全性に対する関心の高まり、といったこともあげられる。現在アメリカのコミュニティガーデンは、ニューヨークの都市部だけでも2万カ所を超えといわれ、全米のコミュニティガーデナーの数はざっと300万人、700万人の市民が空きスペースの出るのを待っているという。

カリフォルニア州では、コミュニティガーデンの役割や活動目的を、近隣を美化する／社会的相互作用を刺激し合う／栄養価の高い、安全な食物を生産する／自給自足を促す／地域資源を保護する／レクリエーションや教育のための機会を生み出すことにより、人々の生活を向上させると謳っている。これは全米各地に共通する、コミュニティガーデンの基本理念というものである。

日本の市民農園との大きな違いは、地域が抱える様々な課題を、園芸活動を通して改善していこうというためのガーデンであり、園芸セラピーの実践の場である点にある。失業、貧困、ホームレス、アルコール中毒、麻薬、暴力、犯罪、人種差別、ティーンエイジャーの出産・・・等々、大都会のインナーシティではこうした社会問題の数々が、彼らのコミュニティの荒廃に拍車をかけている。壁には落書き、町中にゴミが散らかり、壊れたビルは粗大ゴミ置き場やホームレスの居住場所となり、瓦礫が放置されたままの小さな空き地が無数に点在している。こうした空き地を緑のオアシスに、あるいは菜園や果樹園、花園に生まれ変わらせ、失われてしまった人と人、人とまちとのあたたかい関係や、市民の誇りをもういちど育て直すための苗床にしているのだ。

例えば、サンフランシスコにある非行少年の更正を目的として開設されたコミュニティガーデンでは、荒地地

を果樹園にする試みが、大きな成果を生み出している。このガーデンでは働くことによって、多少の賃金がもらえるシステムで、当初少年たちはお金欲しさにここにやってくる。が、やがて自ら耕した大地に、自ら蒔いた種が芽吹き、少しずつ成長し、やがて見事な実りをみせてくれる感動のドラマを目の当たりにした時、彼らは愛情をかければ応えてくれるモノがあることに気づき、自らの力で自信やプライドを取り戻していくという。

成果が比較的容易に得られ、喜びや楽しみを周囲の人々と分かち合えることができることが、エディブルランドスケープならではのセラピー効果を生んでいる。

#### (2) ビレッジホームズ

アメリカのカリフォルニア州デービス市に、1981年、民間のディベロッパーにより建設された「ビレッジホームズ」にもまた、エコロジカルな住空間整備に向けて、エディブルランドスケープを導入した好事例をみることができる。

ビレッジホームズは、食物やエネルギーの自給をめざす小さなまちで、70エーカーの敷地には240戸の住宅、オフィス、コミュニティセンター、プール、芝生広場、遊び場、果樹園、農場、コミュニティガーデン、パーキング等が配置され、敷地全体がまさに「緑の楽園」と呼ぶにふさわしい環境につつまれている（図4-1）。

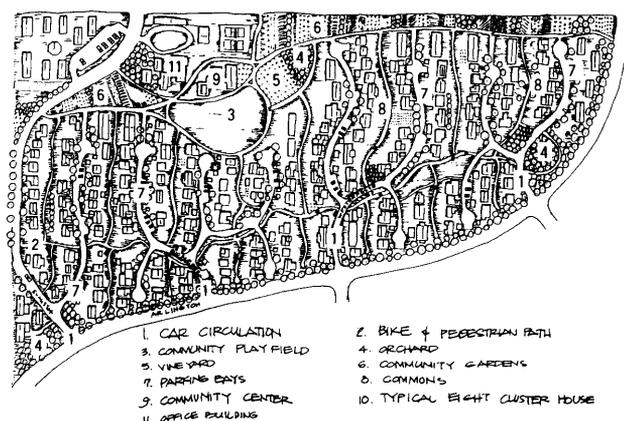


図4-1 ビレッジホームズの配置図

このまちを、緑の楽園といわしめる要素の一つは、「自然との共生」であり、いま一つは「住民間のコミュニケーション」である。設計者のマイケル・コルベルト氏は、その建設にあたり、「生態学的に持続可能なコミュニティの建設」と「強いコミュニティ」の建設を目標に掲げた。

オレンジ、クリ、プラム、アーモンド、クルミ、リンゴ、サクランボ、イチジク、ブドウ・・・。敷地内にはさらに多様性に富んだ果樹が、街路樹として、またパーキングやベンチの日除けとして、ふんだんに植えられている。植栽はすべて落葉樹で、その大半が食べられる実

をつける樹種であり、収穫期には住民は自由にこれを収穫できる。その他、果樹園や共同農場、コミュニティガーデン、そして家々の庭にもエディブルランドスケープは広がる。共有、私的領域を問わず至る所に果樹や野菜、ハーブなどが植えられているので、住民の多くは、野菜や果実の必要量の約70%を敷地内での自給でまかなっているという。野菜も果物も、生ゴミや落ち葉から堆肥をつくり、それらを利用した有機栽培による。

エディブルランドスケープの効用は、それだけではない。リスやうさぎ、鳥やミツバチといった小動物を呼び寄せる。また管理をかねたワークパーティー、収穫祭のパーティ、ハローウィン、クッキング教室、ビレッジホームズ特産のプライベートワイン等々、協働で得る収穫は、住民同士のコミュニケーションをより親密にする。

ビレッジホームズでは、コンクリートの使用は最小限にとどめられていて、敷地には土が多い。道の両側も土のまま、そこに窪みを設けて雨水をため、地中に吸収されるようになっていく。土に蓄えられた水分は果樹の根から吸い上げられ、天然の循環システムをつくり上げている。また、道幅を一般の道路よりも狭くし、果樹で「緑のトンネル」をつくり、夏にはアスファルトから生じるヒートアイランド現象を抑えている。

大半の家に設備されているブドウやキュウイフルーツの棚、あるいは屋上菜園などは、省エネを実現したエディブルランドスケープであり、加えて太陽熱、断熱パネル、日除け、換気窓などの活用により、ビレッジホームズのエネルギー消費量は、エコロジー対策を講じていない家庭と比較して、約30~50%の節約になっているという効果が示されている。

## 5. 結語

エディブル・ランドスケープは、都市化によって量的には減少したが、個々の宅地・家まわりに残存したり、新しい植栽によって、道路からみた場合の景観の一部をなしている。しかし、飽食の時代を背景に子ども期になじみのあった採って食べる体験や、その存在への認識も薄れている。だが、持ち主にとってはその植樹に何等かの思い出か記念の意味があり、愛着の度合いが強いと思われるケースも少なくない。収穫物は生食をはじめ加工などで生活の風物詩となり、また近隣とのコミュニケーションのきっかけとなっている。その活用の目を養えば、個人の庭だけではなく周囲の環境の中にも食生活に活用できる種類が豊富にあり、生活に取り入れることが可能ということを示している。それを仙台のある女性の生活スタイルが示していた。そして、それは農村だけではなく、江戸から明治期の園芸都市を構成した町人地や武家地の後にも生活の知恵として脈打って、今日の宅地や路地裏の鉢植えなどのエディブル・ランドスケープに引き継がれている。そう

いう食・生活文化として捉え直す意味がある。

ところが環境との関わりが薄くなった人間の行為は今日、エディブル・ランドスケープの阻害要因として働く。公共空間においてもそれが食べられるということは、すなわち、誰かの胃に入る私物化であり、公共空間になじまないというエディブル・コンプレックスが正面に出てくる。このような課題に対して国内の事例では市民の参加や行政の営為、民間の努力によってエディブル・ランドスケープを形成している例もあり、また、米国の先駆例からコミュニティでの運用によってより、環境問題と結びついた高度のレベルで実現が可能ということが示された。この例からエディブル・ランドスケープは社会問題へのセラピーの効果が読みとれるが、同様にエディブル・ランドスケープを題材に、市民が環境問題やまちづくり（防災問題も含む）に関心を向ける切り口として、ワークショッププログラムなどを組むことも課題解決への方向として示された。

なお、本研究の遂行にあたって世田谷太子堂・三宿「楽働クラブ」、毎日の生活研究所、ワーカーズ・コレクティブの団体に協力を得、ここに感謝の意を記す。

## <注>

- 1) ビレッジ・ホームズで青少年参加のプロジェクトを実施しているカリフォルニア大学デービス校のMark Francis教授や、Patsy Owen助教授へのヒアリングより
- 2) 世田谷区公園課へのヒアリングより

## <参考文献>

- 1) Rosalind Creasy: "The Complete book of Edible Landscaping", Sierra Club Books, San Francisco, 1982
- 2) 子どもの遊びと街研究会:三世代遊び場マップ, 1982, 三世代遊び場図鑑, 1984
- 3) 子どもの遊びと街研究会:街がはくらの学校だ, 1991
- 4) 湯浅康雄:「気」とは何かー人体が発するエネルギー, pp.49~68, 日本放送出版会, 1991
- 5) 伊藤正男:脳的设计図, pp.203~208, 中央公論社, 1980
- 6) 藤井英二郎:みる庭と触れる庭ー日本人の緑地観, 淡交社, pp.191, 淡交社, 1995
- 7) 藤井英二郎・細田和寿:農村空間の構造と特性に関する研究 茨城県における地域特性, 造園雑誌47(3), pp.137~153, 1984
- 8) 子どもと緑を育てる会:子どもと緑を育てる会通信, 1994
- 9) 木下勇・中村:飯田市りんご並木整備への中学生参加にみる、参加と教育に関する一考察, 日本都市計画学会「都市計画」191号, 1994